文京学院大学人間学部研究紀要 Vol.15, pp.259 ～ 271, 2014.3

中学生の仲間集団の特徴と拒否不安および自己表明との関連

野里　有希*・横山　剛**

本研究では，中学生の仲間集団の特徴と拒否不安および自己表明との関連の様相の調査を行った．また，決まった仲間集団の有無，男女間の差異も合わせて検討した．本研究の結果から，多くの中学生は特定の仲間集団に所属しながら，学校生活を送っていることが明らかとなった．従来の研究では，男子は複数の集団に所属する生徒が多く，女子は集団が相互に独立している生徒が多いことから，男子よりも女子の方が仲間集団の閉鎖性が高い集団に属することが言われてきた．しかしながら，本研究の結果では 2 ～ 3 年生においては，男子よりも女子のほうが閉鎖性が低く，従来とは異なる結果が得られた．男子よりも女子の方が拒否不安が高いことを合わせて考えると，女子は孤立を避けるためにグループに所属し，ひとりになりたくないという強固な思いから，仲間集団をひとつにしぼらず，決まった仲間集団を持ちながらも，複数の友人とも関わるという付き合い方が新たに存在するということが示唆された．

Key Words：仲間集団，拒否不安，自己表明

問題と目的

青年期は，親から心理的に自立し，自己の形成へと向かう時期にあたり，友人関係が情緒的な拠り所として重要な位置を占めるようになり（柴橋，2004），友人との親密な関係を通し，自己の再発見や社会化などの発達が促進される時期である（岡田，2007）．また，学校は，友人関係を育む生活の場として存在しており，そこでの友人関係のあり方は将来，その子どもの社会での人間関係形成に直接影響するものとなる．

井森（1997）や井上（1992）は，小学校高学年頃から行動を共にする相手が限定され，学級

＊大学院人間学研究科

＊＊人間学部心理学科

内に少人数構成の仲間集団が形成されると述べている．また，石田・小島（2009）の中学 1~2 年生を対象に調査を行った研究では，決まった仲間集団が有る人は全体の 80% 以上，石田・丹村（2012）に関しては 98% であった．中学生の多くは，学級において特定の仲間集団に所属しており，学校生活での多くの活動をこの仲間集団と共に行っていることが分かる．しかしながら，榎本（1999）は外面的には一緒に行動し，うまくいっているように見える友人関係でも，一緒にいることに重点が置かれ，内面的には満足感や安心感が得られていないことを指摘している．また，千石（1991）は，他者から「暗い」「面白くない人間」と評価され，仲間外れになることを恐れ，実際以上に明るく振る舞い，深刻な話題を避けるといった現代青年の対人関係上の特徴を見出した．これらの知見から，現代の青年にとって，どのような仲間集団に所属できるかどうかが重要であること，その仲間集団に所属しながらもひとりになることを恐れること，一緒にいつつも相手に対し気を遣い，自分の意思，意見を抑制し，うまく自己主張ができていないことが予想される．

自己主張に関して，柴橋（2004）の行った研究では，中学生は高校生に比べて，「自己表明」する際に相手の気持ちを気遣う「配慮・熟慮」を強く感じていたことを示した．この「配慮・熟慮」は，「自分の考えを言う時は友達を傷つけないように気を付ける」，「友達を困らせるようなことは言いたくない」といった友人を思いやる気持ちを表している．この「配慮・熟慮」には，仲間集団に所属しながらも，ひとりになりたくない，友人に拒否されたくない不安が関連しているように思える．このようにあまりにも相手に対して気遣い，自己主張が出来ない状態が続くと精神的健康に悪影響を及ぼすだろう．

一般的に，友人関係は 1. gang-group，2. chum-group，3. peer-group の順に発達すると言われている（保坂・岡村，1986）．須藤（2011）は，中学生段階の仲間関係では同質であることを求めすぎるため，少しでも異質な部分が感じられる特定の誰かを仲間外れにし続けることで，集団内の同質性は保持され凝集性が高められることを報告している．青年期において，親密でありながら自立的である友人関係を築くためには自分の気持ちや考えを率直に伝え，友人の気持ちや考えを受けとめることが求められるが（柴橋，2001），chum-group にあたる中学生には，同調性を重んじ，異質であると仲間から外されてしまうことへの危惧を抱いており，自分の意見表明を抑制してしまうことが考えられる．

この他に，自己主張を阻害する要因として，所属する仲間集団の特徴が考えられる．石田ら（2009）は，どのような仲間集団においてどのような関わりが顕著になるのかについて検討している．それによれば，リーダーとフォロアーが分かれた階層性の高い集団は拒否不安が高いこと，仲間集団以外の成員を受け入れないという閉鎖性の高い集団ほど集団外の生徒との交流が低いこと，まとまりのある凝集性の高い集団ほど仲間に対する信頼感が高いことが言われている．つまり，階層性の高い仲間集団に属している場合，凝集性の高い仲間集団よりも相手にとって否定的な自己表明をしにくい関係性にある，というようにどのような仲間集団に属しているかが自己表明の阻害要因になることが考えられる．さらに，石田ら（2009）は，仲間集団

の特徴および仲間集団の形成・所属動機の関連について，仲間集団の形成・所属動機には，「グループに入っていないと教室に居づらい」，「ひとりぼっちな人だと思われたくない」という消極的な動機づけが含まれていることを示した．これは言い換えると，親和動機の拒否不安に該当すると考えられる．杉浦（2000）によると，拒否不安は分離不安から人と一緒にいたいという気持ちを表し，他者からの恐れの要素を持つ．杉浦（2000）はこの拒否不安を相手から拒否されて一人ぼっちになることを避けようとする不安として取り扱っている．

以上を総合すると，同調性を重んじる中学生の友人関係には，相手を気遣い自己表明を抑制する傾向とひとりを回避する傾向，どのような仲間集団に属しているかという 3 つの側面が関連していることが考えられる．仲間集団の特徴・拒否不安・自己表明は，どれも友人関係が基盤になっている子どもにとって重要な問題となるが，この 3 つの関連を取り上げた研究は存在しない．そこで，本研究では，仲間集団の特徴と拒否不安および自己表明との関連の様相を調査し，性別や学年，決まった仲間集団の有無による差異も合わせて検討する．

方　法

調査対象者

公立中学 1 年生 107 名，2 年生 147 名，3 年生 170 名の計 424 名（男子 219 名，女子 205 名）に対し，質問紙調査を行った．平均年齢は 13.45 歳（SD=0.93）であった．

調査項目

(1) フェイスシート：年齢，学年，性別，所属する仲間集団の有無，「あなたは，いつも学校で一緒に教室移動をしたり，必ず休み時間に一緒にいるような仲間集団がありますか？」という質問に対し，ある場合は「はい」，その場にいた友人と行動を共にする場合や，基本的に一人で過ごすという場合は，「いいえ」の 2 件法で回答を求めた．

(2) 仲間集団の特徴尺度：石田ら（2009）の仲間集団の特徴尺度を使用した．評定は，「1. 当てはまらない」，「2. あまり当てはまらない」，「3. どちらともいえない」，「4. やや当てはまる」，「5. 当てはまる」の 5 件法で回答を求めた．また，この質問は（1）で所属する仲間集団があると回答した人にのみ，回答を求めた．

(3) 拒否不安尺度：杉浦（2000）の親和動機尺度の中から「拒否不安」を使用した．評定は「1. 当てはまらない」，「2. あまり当てはまらない」，「3. どちらともいえない」，「4. やや当てはまる」，「5. 当てはまる」の 5 件法で回答を求めた．

(4) 友人への自己表明尺度：柴橋（2001）の友人関係における自己表明尺度を使用した．評定は，「1. 当てはまらない」，「2. あまり当てはまらない」，「3. どちらともいえない」，「4. やや当てはまる」，「5. 当てはまる」の 5 件法で回答を求めた．

(5) 自由記述：「いつも決まった仲間集団と一緒にいることで良いことはありますか？」という質問に対し，「はい」「いいえ」の 2 件法で回答を求め，その理由に対し，記述してもらった．

また,「学校生活の中でひとりでいたくないと思うことはありますか？」という質問に対し,「はい」「いいえ」の 2 件法で回答を求め,「はい」と答えた人にのみ，どのような場面でそう思うかを記述してもらった.

結　　果

1. 尺度の検討

（1）仲間集団の特徴尺度：石田ら（2009）の仲間集団の特徴尺度について，主因子法，Varimax 回転による因子分析を行った．因子数を 3 因子に指定し，因子負荷量が .40 に満たない項目を削除し，再度因子分析を行い，各因子の信頼性を検討するために Cronbach の α 係数を求めた．その結果, 第 1 因子「仲間集団の閉鎖性（α =.75）」, 第 2 因子「仲間集団の階層性（α =.77）」，第 3 因子「仲間集団の凝集性（α =.65）」の 3 因子が抽出され，各因子の内的整合性は比較的保たれていることが示された（表 1）．削除項目は,「グループの中で孤立している人がいる」,「他のグループの人が自分のグループに入ってくることを嫌がっている人がいる」,「グループ以外の人とみんなよく遊んでいる」であった.

表 1　仲間集団の特徴尺度因子分析

項目番号	項目内容	*F*1	*F*2	*F*3
第1因子　仲間集団の閉鎖性(α=.75)				
7	グループ以外の人を仲間に入れてあげないという雰囲気がある	**.66**	.19	-.08
1	自分のグループは、グループ以外の人を受け付けないという雰囲気がある	**.64**	.26	-.01
4	グループの人たちは、いつもグループ内の人とだけ遊んでいる	**.63**	.14	.07
10	自分のグループの人は、他のグループの人と仲良くしていない	**.50**	.22	-.21
12	グループ内の友達は別であるという雰囲気がある	**.45**	.30	.04
第2因子　仲間集団の階層性(α=.77)				
17	グループの中には、みんなについていくだけの人がいる	.11	**.65**	-.05
8	グループで何かを決めるときは、提案する人がいつも決まっていて、みんなはそれに従っている	.38	**.59**	-.04
2	グループには、中心的な存在がいる	.32	**.58**	.15
11	グループの中で、意見を言う人と言わない人が分かれている	.23	**.57**	-.19
14	グループ内に上下関係がある	.30	**.44**	-.27
5	グループには、みんなを引っ張っていく人がいる	.23	**.42**	.34
第3因子　仲間集団の凝集性(α=.65)				
3	グループの団結力は強い	.09	.06	**.78**
18	グループのみんなで一緒に遊んだり、活動したりすることが多い	-.00	.02	**.55**
6	グループの中のみんなは仲が良い	-.11	-.01	**.50**
15	グループには、誰にも遠慮することなく、言いたいことを言える雰囲気がある	-.05	-.07	**.48**
	寄与率(%)	14.47	13.76	11.34
	累積寄与率(%)	14.47	28.23	39.58

（2）拒否不安尺度：杉浦（2000）の親和動機尺度内の「拒否不安」について主成分分析を行った（表 2）．項目すべてが第 1 成分に対して，絶対値で .60 以上の負荷量を示した．寄与率は 51.53% であった．また, 信頼性を検討するために Cronbach の α 係数を求め, 拒否不安（α =.88）となり，内的整合性は保たれていることが示された.

表 2　拒否不安尺度主成分分析

項目番号	項目内容	
	＜拒否不安(α=.88)＞	
5	誰からも嫌われたくない	.80
7	仲間外れにされたくない	.79
1	仲間から浮いているように見られたくない	.73
3	できるだけ敵は作りたくない	.72
9	一人ぼっちでいたくない	.72
2	どんなときでも相手の機嫌を損ねたくない	.72
8	一人でいることで変わった人だと思われたくない	.70
4	友達と対立しないように注意している	.65
6	みんなと違うことはしたくない	.61
	寄与率(%)	51.53
	累積寄与率(%)	51.53

(3) 友人への自己表明尺度:柴橋（2001）の友人関係における自己表明尺度について主因子法，Varimax 回転による因子分析を行った．柴橋（2001）にならい，4 因子に指定したが，解釈のしやすさから，3 因子に指定し，再度因子分析を行った．因子負荷量が .40 に満たない項目は削除し，さらに因子分析を行い，第 1 因子「不満・意見の表明（α =.81)」，第 2 因子「喜び・援助要請の表明（α =.80)」，第 3 因子「断りの表明（α =.65)」の 3 因子が抽出された（表 3)．さらに，各因子の信頼性を検討するために Cronbach の α 係数を求めた結果，各因子の内的整合性は比較的保たれていることが示された．削除項目は，「友達に遊びにいこうと言われても 1 人でいたいときはそう言って断る」，「みんなと違う考えを持っていても言わずにまわりに合わせる」，「友達にノートを貸してと頼まれても使う予定がある時ははっきり断る」，「友達に頼まれたことがやってはいけないことだと思っても引き受ける」であった．

表 3　友人への自己表明尺度因子分析

項目番号	項目内容	*F*1	*F*2	*F*3
＜第1因子　不満･意見の表明(α=.81)＞				
10	友達の考えに賛成できないとき「私はそう思わない」とはっきり言う	**.61**	-.05	.11
19	友達の行動が自分にとって迷惑だと思うときはその友達にやめてと言う	**.60**	.11	.25
18	友達と考え方が違うと思ったときでも話し合ったり、議論しようとする	**.57**	.18	-.08
15	友達のしていることに不満を感じたときはその気持ちを友達に言う	**.56**	.22	.16
2	まわりの友達にどう言われようと正しいことは自分の信念を貫く	**.52**	-.00	.04
22	まわりに迷惑な行動をしている友達にははっきり注意する	**.50**	.14	.22
25	分担をした仕事をしようとしない友達にははっきり注意する	**.49**	.17	.14
6	友達に意見を求められたときは自分の考えをはっきり言う	**.48**	.25	.05
23	貸したものをいつまでも返してくれない友達には返してとはっきり言う	**.43**	.13	.30
11	友達の無神経な言い方で傷ついたときは自分の気持ちをはっきり言う	**.43**	.20	.22
＜第2因子　喜び･援助要請の表明(α=.80)＞				
24	面白いことや感動したことがあったとき友達にその気持ちを伝える	.23	**.64**	.11
17	友達のしたことがいいなと思ったときはその気もちを言葉で表す	.19	**.62**	-.01
9	友達に感謝しているときでも言葉にして表すことはない	-.04	**.58**	-.03
5	どうしていいか分からないことがあって困ったときは友達に相談する	.03	**.58**	.10
1	友達に強く言い過ぎて悪かったと思ったときはその気持ちを伝える	.11	**.55**	-.21
21	友達にほめられてうれしいときはその言葉を素直に表す	.18	**.55**	-.01
13	つらいときや苦しいときはその気持ちを友達に伝える	.13	**.53**	.11
26	一人ではできないようなことで困っているときは手伝ってと友達に頼んでみる	.19	**.47**	.17
＜第3因子　断りの表明(α=.65)＞				
7	友達からからかわれて不愉快になっても怒ったりしない	.08	.00	**.69**
3	友達に怒りや不満を感じたときでもその気持ちを表さないようにする	.15	.06	**.60**
8	友達から頼まれたことはやりたくないことでも断らない	.24	-.04	**.48**
4	友達に誘われたときは都合が悪くても断らない	.09	.04	**.42**
	寄与率(%)	13.79	12.93	7.61
	累積寄与率(%)	13.79	26.71	34.32

2. 中学生全体の特徴

各尺度にどのような関連があるかを検討した．その結果，仲間集団の階層性と拒否不安の間に正の相関，不満・意見の表明，断りの表明と拒否不安の間に負の相関，喜び・援助要請の表明と拒否不安との間に正の相関が見られた（表 4）．また，閉鎖性と不満・意見の表明，喜び・援助要請の表明との間に負の相関，階層性と喜び・援助要請の表明，断りの表明との間に負の相関，凝集性と不満・意見の表明，喜び・援助要請の表明との間に正の相関が見られた（表 5）．

表 4　仲間集団の特徴・友人への自己表明と拒否不安の相関（全体）

	拒否不安
仲間集団の閉鎖性	.06
仲間集団の階層性	.13*
仲間集団の凝集性	.02
不満･意見の表明	-.19**
喜び･援助要請の表明	.16**
断りの表明	-.21**

*p<.05 **p<.01

表 5　仲間集団の特徴と友人への自己表明の相関（全体）

	不満･意見の表明	喜び･援助要請の表明	断りの表明
仲間集団の閉鎖性	-.11*	-.20**	-.06
仲間集団の階層性	.00	-.16**	-.12*
仲間集団の凝集性	.23**	.38**	-.03

*p<.05 **p<.01

3. 決まった仲間集団が有る人と無い人の特徴

データに欠損があった 4 名を除く 420 人に対し，分析を行った．その結果，決まった仲間集団を有すると回答した人は 330 名，無いと回答した人は 90 名であり，75% の生徒が決まった仲間集団を有していることが示された．

決まった仲間集団の有無で分けた際に，各尺度にどのような関連があるかを検討した．その結果，決まった仲間集団の有無に限らず，不満・意見の表明，断りの表明と拒否不安との間に負の相関，決まった仲間集団が有る人のみ，喜び・援助要請の表明と拒否不安との間に正の相関が見られた（表 6）．

表 6　友人への自己表明と拒否不安の相関（仲間集団有無別）

	仲間集団有	仲間集団無
	拒否不安	
不満･意見の表明	-.17**	-.25*
喜び･援助要請の表明	.12*	.17
断りの表明	-.21**	-.23*

*p<.05 **p<.01

決まった仲間集団の有無で拒否不安に差があるかどうかを対応の無い t 検定を用いて検討した結果，決まった仲間集団が無い人よりも有る人の方が拒否不安が高いことが示された（t（402）=2.84，p<.01）．次に，友人への自己表明に差があるかどうかを対応の無い t 検定を用いて検討した結果（表 7），決まった仲間集団が無い人よりも有る人の方が，喜び・援助要請の表明を行うことが示された（不満・意見の表明 :t（400）=1.33, ns, 喜び・援助要請の表明 : t（403）=3.14, p<.01，断りの表明 : t（412）=0.16, ns）．

表 7　拒否不安と友人への自己表明尺度得点の平均値と標準偏差（仲間集団有無別）

	拒否不安	不満と意見の表明	喜び･援助要請の表明	断りの表明
仲間集団有	3.59(0.88)	3.36(0.66)	3.86(0.71)	3.41(0.80)
仲間集団無	3.29(0.87)	3.47(0.69)	3.60(0.69)	3.40(0.80)

※( )はSDである

4. 男女，学年の特徴

仲間集団の特徴尺度得点を従属変数とした学年×性別の 2 要因分散分析を行った結果，閉鎖性では性別の主効果（F（1,320）=6.98, p<.01），交互作用（F（2,320）=6.82, p<.01）が有意であり，学年の主効果（F（2,320）=1.39, ns）は有意でなかった．単純主効果の検定を行ったところ, 2 ～ 3 年生において性別の単純主効果が有意であった（2 年生における性別の単純主効果 :F（1,320）=5.52, p<.05，3 年生における性別の単純主効果 F（1,320）=19.71, p<.01）．つまり，2 ～ 3 年生では男女間に有意に差があり，2 ～ 3 年生においては女子よりも男子の方が仲間集団の閉鎖性が高いということが言えた．階層性では，学年の主効果（F（2,324）=5.00, p<.01），性別の主効果（F（1,324）=38.22, p<.01），交互作用（F（2,324）=7.38, p<.01）が有意であった．単純主効果の検定を行ったところ，男子において学年の単純主効果が有意であり（F（2,324）=11.95, p<.01），2 ～ 3 年生において性別の単純主効果が有意であった（2 年生における性別の単純主効果：F（1,324）=40.96 , p<.01，3 年生における性別の単純主効果：F（1,324）=25.67, p<.01）．つまり，男子において 1 年生と 2 ～ 3 年生の間に有意に差があり，2 ～ 3 年生は 1 年生よりも階層性が高いことが示された．また，2 ～ 3 年生は女子よりも男子の方が階層性が高いことが示された．凝集性では，学年の主効果（F（2,323）=0.04, ns），性別の主効果（F（1,323）=2.30, ns），交互作用（F（2,323）=0.25, ns）はいずれも有意でなく, 学年, 性別による差異は見られなかった．

拒否不安尺度得点を従属変数とした学年×性別の 2 要因分散分析を行った．その結果，学年の主効果（F（2,402）=0.20, ns），交互作用（F（1,402）=4.21, ns）はいずれも有意でなく，性別の主効果（F（2,402）=1.24, p<.05）のみ有意であった．このことから，女子の方が男子よりも拒否不安が高いことが示された．

友人への自己表明尺度得点を従属変数とした学年×性別の 2 要因分散分析を行った．その結果，不満・意見の表明では，性別の主効果（F（1,400）=4.77，p<.05）のみ有意であり，学年の主効果（F（2,400）=0.98,ns），交互作用（F（2,400）=1.54,ns）は，いずれも有意でなかった．このことから，男子の方が女子よりも不満や意見を表出することが示された．喜び・援助要請の

表明では，性別の主効果（$F(1,402)=44.93, p<.01$）のみ有意であり，学年の主効果（$F(2,402)=0.46$, ns），交互作用（$F(2,402)=0.17$,ns）はいずれも有意でなかった．つまり，女子の方が男子よりも喜び・援助要請の表明を行うことが示された．断りの表明では，学年の主効果（$F(2,412)=0.13$, ns），性別の主効果（$F(1,412)=2.72$, ns），交互作用（$F(2,412)=0.42$, ns）はいずれも有意でなく，学年，性別による差異は見られなかった（表 8）．

表 8　各尺度の平均値と標準偏差（男女・学年別）

	1年生		2年生		3年生	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
仲間集団の閉鎖性	1.80(0.73)	2.01(0.70)	2.16(0.72)	1.86(0.58)	2.14(0.79)	1.61(0.61)
仲間集団の階層性	2.05(0.83)	2.01(0.66)	2.79(0.83)	1.93(0.55)	2.63(0.79)	1.99(0.64)
仲間集団の凝集性	3.91(0.82)	4.12(0.73)	3.99(0.70)	4.08(0.67)	4.01(0.76)	4.08(0.66)
拒否不安	3.34(1.01)	3.74(0.73)	3.53(0.78)	3.59(0.87)	3.45(0.93)	3.54(0.92)
不満･意見の表明	3.51(0.72)	3.28(0.72)	3.31(0.65)	3.33(0.57)	3.54(0.66)	3.31(0.70)
喜び･援助要請の表明	3.55(0.68)	3.96(0.71)	3.56(0.69)	4.07(0.57)	3.61(0.69)	4.06(0.71)
断りの表明	3.56(0.88)	3.33(0.78)	3.47(0.79)	3.37(0.77)	3.42(0.77)	3.37(0.80)

※(　)はSDである

また，自由記述で得られた回答において，臨床心理学コースの院生 2 名により，内容の共通点を基に KJ 法によるカテゴリー分類を行った．その際，学年，性別で差がみられるかを検討した（表 9）．女子にはすべて 1 人回避が見られたが，男子では見られなかった．また，3 年生男子のみに情報交換が見られ，1･3 年生男子のみに遊びの広がりが見られた．

表 9　決まった仲間集団と一緒にいて良いことの理由（男女・学年別）

	学年	カテゴリー		回答例
男子	1年生(55)	親密な関係性の確立(8)	信頼関係が築ける	信頼できる友達ができる
		心理的サポート(31)	毎日が楽しく過ごせる	心が落ち着く
		遊びの広がり(9)	昼休みにサッカーができる	大人数でいろいろな遊びができるようになる
		その他(7)	宿題がどこだかを教えてくれる	移動教室のときに正しい場所に行ける
	2年生(64)	親密な関係性の確立(5)	友好関係が深まる	いつも一緒にいると仲が深まる
		心理的サポート(49)	一緒にいると楽しい	毎日が明るくなる
		その他(10)	わからないことを教えてくれる	いろいろなことが分かる
	3年生(101)	親密な関係性の確立(7)	友達同士の絆が深まる	お互いのことが分かってくる
		心理的サポート(64)	自分の気持ちを隠さずに済む	自分が明るくなれて、居心地もいい
		遊びの広がり(9)	昼休みに遊べる	外で遊ぶとき人数が多いのでサッカーができる
		情報交換(7)	社会に役立つような情報が手に入る	新しい情報を交換し合うことが好き
		その他(14)	あまり仲の悪い人にはなんでも話すことはできない	いろいろな話をすることが出来る
女子	1年生(70)	親密な関係性の確立(19)	お互いのことをよく知れる	ずっと仲良くなれる
		1人回避(8)	いつも一緒にいるから一人にならない	仲間外れにされる心配がない
		心理的サポート(32)	分からないことも相談できる	困ったときに助けてくれる
		その他(11)	意見が似てくる	忘れ物をしていないか確認できる
	2年生(85)	親密な関係性の確立(6)	その人と仲良くなれる	お互いのことを知ることが出来る
		1人回避(9)	絶対に一人でいることがない	グループを作ってと言われたら、一緒のグループになれるから
		心理的サポート(59)	毎日学校に来るのが楽しくなる	つらいことを一緒に分かち合える
		その他(11)	行動に困らない	いろいろな情報が得られる
	3年生(85)	親密な関係性の確立(9)	仲がもっとよくなる	一緒にいることでさらに仲良くなれる
		1人回避(9)	ペアを組むときにひとりだと困る	ひとりになることはない
		心理的サポート(61)	正直になんでも話せる	授業や部活がつらくても、休み時間に友達と話せるので、それが楽しみ
		その他(6)	特別いいというわけではないけれど、一緒にいてもいいと思う	本当はクラス全体でグループと呼べるような関係を築きたいが、そうはいかないのでグループでいた方がよい

次に，学校生活の中でひとりでいたくないと思う場面に対し，学年，性別で差がみられるかどうかを検討した（表 10）．ほぼ全ての学年の男女において，休み時間と移動教室，ひとりになったときが挙げられた．また 1 年生の女子よりも，2，3 年生の女子の方がひとりになりたくない場面が多く挙げられた．

表 10　1 人でいたくない場面（男女・学年別）

		カテゴリー							
男子	1年生	移動教室	ひとりになったとき	その他					
	2年生	休み時間	移動教室	その他					
	3年生	休み時間	移動教室	ひとりになったとき	ひとりでいる人を見たとき	登下校	放課後活動	その他	
女子	1年生	休み時間	移動教室	ひとりになったとき	その他				
	2年生	休み時間	移動教室	ひとりになったとき	ひとりでいる人を見たとき	グループ作業	放課後活動	教室	その他
	3年生	休み時間	移動教室	ひとりになったとき	登下校	グループ作業	放課後活動	教室	その他

考　　察

本研究の目的は, 仲間集団の特徴と拒否不安および自己表明との関連の様相を調査し, 決まった仲間集団の有無，男女間の差異を合わせて検討することであった.

(1) 中学生の全体傾向

決まった仲間集団に所属している生徒の割合は 75% であり，多くの中学生は特定の仲間集団に所属しながら，学校生活を送っていることが明らかになった.

友人への自己表明と拒否不安との相関より，拒否不安が高いほど不満・意見の表明，断りの表明という相手にとってネガティブな印象となりうる表明を抑制し，喜び・援助要請の表明といった比較的ポジティブな表明を行うことが明らかになった．これは，自分が相手にとってネガティブな印象となりうる意見を表明すると，相手に嫌な思いをさせ，自分の評価が落ちる，嫌われるという思いが存在することが考えられる．一方，喜び・援助要請の表明は,「面白いことや感動したことがあったときは友達にその気持ちを伝える」,「友達のしたことがいいなと思ったときはその気持ちを言葉で表す」等，友人と喜びを分かち合う，共感し合うという項目で構成されている．中学生に見られる chum-group は互いの共通点・類似性を確かめ合うのが基本であり（保坂・岡村，1986），喜び・援助要請は相手とポジティブな感情を共有することが出来る方法である. ポジティブな感情は類似性を確かめる共通の話題として取り扱いやすく，相手に悪い印象を与えたり，嫌悪を抱かせることはない．また，相手に嫌われるのを恐れる思いから，喜び・援助要請の表明を行うのだと考える.

仲間集団の特徴と友人への自己表明との相関では，閉鎖性や階層性が高いと喜び・援助要請の表明を抑制し, 凝集性が高いと喜び・援助要請の表明を行うことが示された．栗原(1996)は, 現在の友人関係には従来型の親密な友人関係をもつ青年と「自他を傷つけあわない，群れていることの安心感から成り立つ」という友人関係の 2 つのパターンが存在すると述べている．これより，階層性，閉鎖性が高い人は一緒にいることに重点を置き，自分の意見を表明し，自分を受け入れてもらうことには重点を置いていないと推察される．仲間集団の閉鎖性や階層性が高いと，自分が相手にとってネガティブな印象となりうる意見は抑制することが見受けられ, 凝集性が高いとお互いを信頼している関係にあるため，不満・意見でも言いたいことを言い合える建設的な友人関係を築けているのだと考える.

(2) 決まった仲間集団が有る人と無い人の特徴

決まったグループの有無に関わらず，拒否不安が高いと不満・意見の表明，断りの表明を抑制することから，友人との同質性を求める中学生ではネガティブな印象を与える意見を相手に率直に表現することに困難が伴い, 本音を話すことが出来にくい時期にあることが示唆された.

また，決まった仲間集団が有る人のみ，拒否不安が高いと喜び・援助要請の表明を行うことが示された．Schachter（1951）は「自分の所属する集団内での斉一性が高まることで，同調に対しては受容という報酬が，逸脱者に対しては無視という形の制裁が取られることを報告している．類似性を確かめる話題として取り扱いやすいポジティブな感情を共有することで友人との同調をはかり，逸脱者にならないように喜び・援助要請を表明し，関係性を保とうとしているのかもしれない．対して，仲間集団が無い人は，仲間外れにならないようにとにかく一緒に行動し，外れないようにする青年期の消極的な同調行動傾向や仲間集団に所属しなくてはならないという強固な考えは持ち合わせていないのだと考えられる.

(3) 性別，学年の特徴

仲間集団の特徴では，2 ～ 3 年生において女子よりも男子の方が閉鎖性が高いという結果が得られた．従来の研究では男子は複数の集団に所属する生徒が多く，女子は集団が相互に独立していること，女子の方が男子よりも閉鎖性が高いことが言われてきたが（石田ら，2012），本研究では従来の結果とは異なる結果が得られた．本研究の女子の閉鎖性の平均値は，石田ら（2009）の仲間集団の特徴尺度作成時よりも低く，閉鎖性に男女差が生じたのは，女子の閉鎖性がこれまでに比べ，低くなったためだと考えられる．また，男子よりも女子の方が拒否不安が高いため，女子は孤立を避けるためにグループに所属し，ひとりになりたくない強固な思いから，仲間集団をひとつにしぼらず，決まった仲間集団を持ちながら，複数の友人とも関わるという新たな付き合い方の存在が示唆された．黒川・大西（2009）は，仲間集団を開けた関係にすることで，集団内いじめが起きた場合に他の学級成員に認知されやすくなったり，仲間集団以外の学級成員に助けを求めやすくなる．場合によっては，ほかの仲間集団に移動することも可能となり，いじめを受けることを回避することが出来ると述べている．いじめとまではいかなくとも，自らの所属しているグループの閉鎖性が高いほど外集団との交流が少なくなり，自分が所属している仲間集団から排斥された場合にひとりになってしまうのを危惧しているのかもしれない．中学生では友人と一緒の考え，気持ちであることによる親密さを求め，特にそれが顕著であることが言われているため（柴橋，2004），友人とポジティブな感情を共有すること，友人との同調を測ることが出来る喜びの表明を行うことで，親密さを高めようとしていると考えられる．それと対比的に不満・意見の表明は，相手に自身の意見をはっきり言う，注意するという項目が含まれていることから，男子よりも女子の方が抑制するのであろう．これらのことから，所属する仲間集団に気を遣いながらも，ひとりにならないように周囲の友人とも関わろうとする現代思春期女子の複雑な心理が見られた.

また，本研究でも石田ら（2009）と同様 2 ～ 3 年生においては女子よりも男子の方が階層性

が高いことが示された．男子は女子よりも競争に対して積極的であり，かつ肯定的に捉えていることが報告されており，男子の友人関係は，相手と競争することによって得られる情緒的つながりや相手の存在による自分の向上を重視した関係である（太田, 2004）. 男子は日頃から様々な場面において，自分よりも優れた友人を抜かしたいという競争心を持っているために友人と自分の差を意識すると考えられ，仲間集団内での階層性を女子よりも感じているのかもしれない．それに加え，男子は 1 年生よりも 2 ～ 3 年生の方が階層性が高いことが示された．調査時期は 7 月であり，1 年生は周囲のサポートを受けつつ，学校生活に慣れていく段階であり，仲間集団内でもまだお互いを探るような関係であるため，2 ～ 3 年生よりも階層性が低くなったのだろう．また，2 ～ 3 年生の時期になると，学校生活にも慣れ，友人関係内での役割が固定化されるため，階層性が高まるのだと考えられる．

いつも決まった仲間集団と一緒にいることで良いことがある理由では，女子にすべて 1 人回避が見られたのに対し，男子では見られなかった．この 1 人回避は，石田ら（2009）の仲間集団の形成・所属動機の消極的な動機づけと一致する．本研究においても，女子のひとりを恐れること自体がグループの所属動機に反映されていることが明らかとなった．また，3 年生男子のみに情報交換，1･3 年生男子のみに遊びの広がりが見られた．青年期の友人関係では，現代の男子では遊ぶ関係から互いの相違点を理解し, 互いに尊重した関係へと変化していく（榎本, 1999）．3 年生になり，互いに能力を認め合う関係性へと変化すること，また受験というライフイベントを控えていることで，互いに有益となる情報交換が見られたのだと考えられる．遊びの広がりは，遊び内容の拡大と大人数遊びの実現化を示しており，1 年生男子の方が 3 年生男子よりも遊ぶという内容が多く見られた．これは，関係性の移行の表れだと考えられる．また，運動やスポーツ・遊びに参加することは，ストレスを発散させ，生活を明るく順調に保つうえで効果があり，ストレスに満ちた現代の子どもたちにとって，日常的に遊びやスポーツがあることは，生活の中のオアシスにもなるし，ストレスに対抗する力を養うことにもつながる（波多野，1998）．3 年生では部活動を引退し，受験勉強が盛んになる時期である．受験というストレスに耐え抜くためには，勉強への注意を逸らし，情動化の安静をはかる必要があったのだと考える．

学校生活の中でひとりでいたくない場面では，1 年女子よりも 2，3 年女子の方がグループ作業や放課後活動，教室のカテゴリーが増えていた．女子は学年が上がるにつれて様々な場面でひとりでいたくないという思いを抱くことが言える．また，ひとりでいたくない場面の回答において, 2 種類の質の異なる回答が得られた．それは,「移動教室」「休み時間」,「放課後活動」,「教室内」などの漠然とした場面を想起した場合と「ひとりになったとき」「ひとりでいる人を見たとき」などの実体験を通して想起したとされる場合の 2 種類である．このような質的な差異は，実体験を通して想起した場合の方がより詳細にひとりでいたくない場面を想起している可能性があり，拒否不安の強さにも差異がある可能性がある．今後，詳細な検討が必要である．

結　論

中学生の仲間集団の役割は，少なからず，学級内での居心地のよさにつながると考えられる．思春期以降の集団では多くの場合，一旦形成されるとある程度その関係が持続し，成員の出入りもさほど多くない．しかし，本研究の結果から，女子は特定の仲間集団に所属しつつ，それ以外に，ひとりにならないように広く周囲の友人とも関わろうと努力していることが示唆された．三島（1995）は，小学校高学年頃から仲間の目が気になり，逸脱することを恐れ，仲間と同じように振舞おうとし，無視や仲間はずれといった関係性攻撃を手段として，相手に危害を与えるいじめが，仲間集団内で頻繁に行われていること，仲間集団内いじめが存在することを示唆している．今回抽出された女子の現象はこのような相手からの攻撃を避けようとしているものかもしれない．しかし，仲間集団を外れることに対してもリスクを伴うことが言われており，ただグループから離れれば解決する単純な問題ではないようである．以上の女子中学生の事象は，中学生の友人関係並びに不登校等の悩みを取り扱う，臨床心理学的援助に生かしていける現象であろう．

友人グループに所属しているという感覚は，まだ未熟で自信が持てない中学生にとって，自分は他者に受け入れられているという自己肯定につながるのではないだろうか．しかし，他者から拒否され，ひとりぼっちになることを恐れ，自分の意見を抑制することは，自分を表現し，お互いの相違を確認することが出来なくなる．また，意見の多様性，視野が広がる可能性がなくなってしまうと言え，社会性スキルの発達を阻害しているということも考えられる．本調査では中学校 1 校のみの調査であったため，今後は，調査対象校を増やし，さらなる検討が必要である．

本論文は平成 24 年度本学心理学科卒業論文に加筆修正を行なったものである．

引用文献

榎本淳子　1999　友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究 47，p180-190
波多野 義郎 1998 子どものストレスと遊び・運動　子どものストレス 親・教師のストレス 上手な解消法とつきあい方　52，18，p73-79
保坂 亨・岡村 達也 1986　キャンパス・エンカウンターグループの発達的・治療的意義の検討　心理臨床学研究　4，p15-26
井森 澄江　1997　仲間関係と発達　子どもの社会的発達　東京大学出版会　p50-69
井上 健治　1992　人との広がり　対人関係と社会性の発達　金子書房　p3-28
石田 靖彦・小島 文　2009　中学生における仲間集団の特徴と仲間集団の関わりとの関連 ～仲間集団の形成・所属動機という観点から～　愛知教育大学研究報告　58，p107-113
石田 靖彦・丹村 明寿香　2012　中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりが学校における

規範意識と逸脱行為に及ぼす影響　愛知教育大学研究報告 . 教育科学編 61，p117-125
栗原 彬　1996　やさしさの存在証明　増補新版　新曜社
黒川 雅幸・大西 彩子　2009　準拠集団規範がいじめ加害傾向に及ぼす影響　―準拠枠としての仲間集団と学級集団―　福岡教育大学紀要　58，4，p49-59
三島 浩路　1995　集団内いじめの予防と解消　特別活動研究　343，9，p50-53
太田 伸幸 2004 学習場面におけるライバル認知に関する研究：ライバルの類型・友人に対する競争意識の比較　愛知工業大学研究報告 A　基礎教育センター論文集　39，p33-43
岡田 努　2007　現代青年の友人関係と自己像・親友像についての発達的研究　金沢大学文学部論文集　行動科学・哲学編　27，p17-34
Schachter，S. 1951 Deviation，rejection and communication，Jounal of Abnormal and Social Psychology 46，p190-207
千石 保　1991 「まじめ」の崩壊　―平成日本の若者たち―　サイマル出版会
柴橋 祐子　2001　青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち　発達心理学研究　23，2，p123-133
柴橋 祐子　2004　青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因　教育心理学研究　52，p12-23
須藤 春佳　2011　親友関係の光と影　神戸女学院大学論集　58，2，p87-102
杉浦 健　2000　2 つの親和動機と対人的疎外感との関係 : その発達的変化　教育心理学研究 48，p352-360

謝　辞

本研究の作成にあたり，本学 文野洋准教授にご教授いただきました．また，本学学部・大学院修了生であり，八王子市教育センター 総合教育相談室 小阪五月様から，臨床上，今日の中学生の仲間関係について，本研究で示唆された女子中学生の関係が実際に見られる旨をお聞きいたしました．深く感謝申し上げます．また，調査に協力してくださった中学校の先生方並びに中学生の皆様にも心から御礼申し上げます．

（2013.9.25 受稿，2013.10.29 受理）